

# おばあちゃんと朝顔

葛岡 昭男

今年（平成二十五年）の夏は例年と違って大変な猛暑の日々が続いた。一昨年の春には千年に一度と言われた東日本大震災が列島を襲った。東北三県は未曾有の被害に見舞われた。

更に追い打ちをかける様に、東京電力福島発電所での原発事故が発生したりして、電力不足が危ぶまれていたのでかなりの節電対策が懸念されていた。

毎年ながら、わが家では夏の風物詩である「朝顔」は今でも絶やすことなく咲かせている。勿論種子を蒔いて発芽させ、その苗を移植して更に支柱をたてて可愛がっている。

近頃はホームセンター等の園芸用品売り場でも、時期になると沢山の品種の朝顔の苗を売っているので種を蒔いて苗を作る煩わしさは無用なので苗作りから始める園芸愛好家は売店のオーナーの話だと今日では少なくなったそうである。

花の苗ばかりでなく家庭菜園を楽しむ人々も増えて「きゅうり」「茄子」「南瓜」「トマト」等の野菜の苗も花の苗と共に季節になると園芸店の棚に並んでいる。

春、淡い可憐さを見せて垂れさがり、その花言葉を「純愛」と囁かれる「カイドウ」が散った四月中旬に、朝顔の原種「青」「紫」「桃色」「白」の四種類の種をそれぞれに大きめの苗床用のプランタンに蒔いた。

湿り気を絶やさない程度の水を如雨露で注ぎ世話をする。近頃では水やりも骨がおれるようになって朝夕は一仕事になるが幸に孫が手伝ってくれるので助かる。

一週間ほどで発芽してくれて、その後二葉が出て茎の中央の芯が伸びて本葉が二枚くらいに育ったころの苗を七号鉢に移植する。

お隣の花好きな高瀬さんのおばあちゃんにも「朝顔の種を蒔いたので苗は買わないようにして下さい」と伝えてあるのでおばあちゃんも芽生えを楽しみに待っていてくれる。

朝顔の苗は育ちが早く植え変えて間もなくすると、肥料を与えなくてはいけない。肥料は小粒で固形の魚の骨粉が適していて鉢の両サイドに穴をほじくり少し深めに与えるるとよく効く。私の経験だと苗が落ち着くまでは油粕等は、朝顔には効きすぎて逆に栄養過多で枯れるおそれがあるので蔓が出るまでは与えないようにしている。種は去年採取した全部を蒔くと、全部発芽するのでお隣のおばあちゃんに差し上げても沢山の苗が残ってしまう。

せっかく芽生えてくれたのに人間の勝手に処分してしまうのも可愛そうなので余った苗はそのまま間引き等をしてプランタンに残しておく。

伸びの早い朝顔は植え変えて一週間から十日くらい経つと支柱を欲しがらる。以前は篠竹を用意して支柱にしたが今では支柱用の篠竹は手に入らず、人工の支柱が園芸店に並んでいて、長さや太さも選んで好きな支柱を買い求められる。その他にも朝顔用のグッズで蔓がつかまり易い専用の網も売っている。

園芸好きのお隣のおばあちゃんは朝顔が終わると、蔓は丁寧に外し種を採取して、支えていた篠竹の支柱をきれいに水で洗い日光で乾かして来年まで納屋で保存している。丁寧に扱えば五年から六年は使えるそう。

今年は梅雨が長かったせいか鉢植した朝顔の三鉢が根腐れしてしまった。こんな時は余ったが捨てがたく残しておいたプランタンの苗が身代わりになってくれる。

草花は朝顔に限らず丹精すれが必ず応えてくれるから嬉しい。六月の中旬には伸びた蔓の葉っぱの茎に蕾が付くが、この頃に二番肥を沢山与えると養分が蔓や葉っぱに行ってしまう蕾は落ちてしまうのでほどほどに与えるようにしている。

七月初旬の頃になると、それぞれ色によって異なるが「白」の朝顔は蕾を付け始める。その後「青」「紫」「桃色」と順番に咲きだす。東京のお盆の七月十三日には全部の朝顔が咲き競う。

日ごとに暑さが増すので地方のお盆である八月十三日(旧盆)の頃は水を絶やしてはいけない。毎朝数個の朝顔が咲き、道行く人々に和みを与える。日射しが強いと午前中には萎れてしまう。

移植しないでそのまま苗床に残した朝顔たちは元肥料がそのまま養分となるので勢いがよく苗床の上に張った網の上を這いながら沢山咲いてくれるのでとてもいいらしい。

「暑さ寒さも彼岸まで」野辺にアキアカネが飛び、墓地に彼岸花の咲く九月に入る

と園芸店では秋植えの球根が出始める。

この頃の季節になると、夏を涼しげに癒してくれた朝顔は次の主役へとバトンタッチをしなければならぬ運命となる。

チューリップや百合の王様「カサブランカ」も球根を植えなければならない。朝顔は、生真面目な一年草であり、付けた蕾は秋風が吹く頃になっても必ず花を咲かせる。桔梗たちに混じって秋風になびいていて植物ながらもとてもいじらしい。

庭ではコオロギが啼き始め、コスモスも咲きだしたのに朝顔の蔓の先端に付いた蕾は秋の七草である女郎花といっしょに風に揺らいている。

いのちの限り咲き尽くす朝顔の根本の部分には既に真っ黒な種子が宿っている。蔓の先端では親に甘えるように咲いた奥手の花に養分を送り続けている。

秋植えの球根はこの花が咲き終わるまで暫らくの間は植えかえは待ってもらうことにしている。お隣のおばあちゃんは植木ばかりでなく暮らしの中でも凜然として几帳面で律儀な方であり、屋敷を取り巻く道路はきれいに掃き清められ落ち葉等も殆んど無く、人々が生活して行くための仕来りから始まり日本女性の鏡的なおばあちゃんであった。

おばあちゃんは一粒種のお孫さんの面倒を見るため郷里の岐阜にご主人を残して嫁ぎ先の娘さん宅（お隣）で暮らしておられたのである。四季折々には季節の食材でちらし寿司を作ったりしてはわが家にも届けてくれた。それは美味しく出来ていた。しかし働き通しのおばあちゃんに神様が見かねたのでしょうか、街路樹の花みずきが新芽を吹き出した頃だった、急逝心不全であっけなく旅立ってしまった。郷里の岐阜からご主人もかけつけられたが最後を看取することも出来ずに一人で黄泉の国に向かわれた。

おばあちゃんはお孫さんも中学校を卒業して四月からは高校生になるのでお孫さんの方から「岐阜で一人暮らしのおじいちゃんのお傍へ帰ってもいいよ！」と言われ娘さん夫妻の了解を得て既に荷造りも終わって二日後には岐阜のご主人様の傍らに帰るばかりになっていたので本当に驚いた。

翌日おばあちゃんのご遺体は霊柩車に乗って街路樹の花みずきの下から郷里の岐阜へ帰られた。わが家全員と咲き誇る花みずきが仏様になられたおばあちゃんを見送った。

季節は悲しみや寂しさを待ってくれず、この夏はおばあさんの新盆を迎えた。

お盆供養を終えて戻った娘さんが郷里のお土産を届けて下さった。  
目頭を押さえて次のように話してくれた。〳岐阜提灯の明りに照らされた廊下から眺める庭の垣根には生前大好きだったおばあちゃんを手向けるように「紫」「青」「白」「桃色」の朝顔の蔓が支柱にしっかりと掴まって夕暮れになっても萎まずに咲き誇り故人を偲んでいたそうだ〴〵〵〵〵〵。

## 合掌

葛岡 昭男

元証券マン・作詞家・エッセイスト  
日本歌人クラブ会員・新アララギ短歌会同人  
日本音楽著作家連合会員

著書

珠玉の政治思想（鹿島出版）

ゆくりなくも（鶴書院）

岳父と枝豆（鶴書院）

蘇生の楨（鶴書院）

私の母物語（日本文学館）

受賞

文部大臣賞 読売新聞社賞 流山市長賞 他